

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520612

研究課題名（和文）：近現代モンゴルにおける遊牧の変容

研究課題名（英文）：The change of the nomadism in modern Mongolia

研究代表者：吉田 順一（YOSHIDA JUNICHI）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70063716

研究成果の概要（和文）

私はモンゴル人たちの遊牧とその変化を研究した。彼らの遊牧は、モンゴル国では今も維持されているが、内モンゴルでは 20 世紀中頃までに大半が定着牧畜と農牧に変わった。だがこの状態は、1980 年代以後に市場経済になった後、大きく変化した。すなわち内モンゴルでは牧畜が畜産に転換させられ、モンゴル国では畜産の要素をもつ集約化牧畜が試みられ始めている。私はこれらのことを指摘し、またその変化がもつ歴史的意味についても考察した。

研究成果の概要（英文）：

I studied nomadism and its change of Mongolians. Although their nomadism is still maintained by Mongolia, most changed to fixing pastoralism and agro pastoralism by the middle of the 20th century in Mongolia. But this state changed a lot, after changing to the market economy after the 1980s. That is, in Inner Mongolia, pastoralism was converted into animal industry and in Mongolia, concentration-ized pastoralism with the element of animal industry has begun to be practised. I pointed out these facts. And I also considered the historical significance which the change has.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：モンゴル、内モンゴル、遊牧、畜産、農耕、都市、草原環境

1. 研究開始当初の背景

内陸アジアのステップの牧畜は遊牧だが、近現代に凋落の途をたどり、現在モンゴル国でなお存在する遊牧にも、内モンゴルで遊牧に替わって営まれている定着牧畜・半牧半農にも、種々手が加えられている。内陸アジアの他のステップの状況も大同小異である。この事態をできるだけ正確に把握し、それが遊牧民の歴史にもつ意味を明らかにしたいと考えたのが本研究の動機である。

2. 研究の目的

内陸アジアの遊牧の凋落という事態を正確に把握し、その変化の過程・理由を、モンゴルを事例にして考察すること。

3. 研究の方法

モンゴル人の伝統的遊牧と、同じ高原の住民であるにもかかわらず清代以後にモンゴルと内モンゴルのモンゴル人の間に生じた生業の違い、その違いの生じた理由を考察する。文献と実地調査から得た資料を使う。

4. 研究成果

本研究では、モンゴルと内モンゴルの両方の伝統的な遊牧とその後のその変化について、変化の問題に重点を置いて、歴史的な観点から考察したが、従来これらの点について両モンゴルを全体として捉え、歴史の観点から考察した研究は、管見の限り存在しない。

本研究では、モンゴルが遊牧を維持してきたのに対して内モンゴルのモンゴル人の生業

が定着牧畜、半牧半農に変わったこと、両モンゴルが社会主義政権下においてそして特に市場経済になってから、畜産の方法を取り入れて、遊牧、定着牧畜、半牧半農の「牧畜」が抱えている粗放性を克服しようとしていることを指摘した。同時に内モンゴルにおいて生まれた畜産と、モンゴルで実施され始めた、畜産に近い要素が認められる集約化牧畜は、農耕社会において私有地と農業の存在を前提にして生まれた畜産と同じように、飼料作物や牧草を栽培し、牧地を私有状態で使うか、そうでないにしても牧地を私有地として使いたがる性質をもつことから、本来農耕に向かないステップにおいて牧地を痛めないように移動しながら営まれてきた遊牧と較べて、ステップを痛めるおそれがあることを指摘した。定着牧畜や半牧半農の牧畜は何とかステップをあまり痛めないですんでいるとしても、畜産が本格的に行われた場合、ステップにとって危険性が高まる。私は内モンゴルにおける牧畜の畜産化の、このような問題点に関して、かつてフフホトで開催された国際学会で研究発表したとき相当反響があった。そこでそれを論文にして内モンゴル師範大学の研究誌に載せたところ、内モンゴル自治区政府の牧畜関係者の会議で取り上げられたと聞いた。そこでそれにその後の研究も若干加えて、「Nüüdiyn mal aj akhuy ba tüüniyg öörchlökh asuudald(遊牧とそれを変革する問題)」（モンゴル文）と題してモンゴルの科学アカデミーの International Institute for the Study of Nomadic Civilization の機関

誌”Nomadic Studies Bulletin 14.2007”に掲載したところ、同国科学アカデミーの研究者が中国における牧畜視察後、モンゴルの牧畜の将来のために拙稿を参考にするようにと政府関係者に渡したと本人から聞いた。このことは、畜産化の問題が両モンゴルにおいて重要な関心をもたれていることを示すと理解される。

両モンゴルの政策は現実の必要から実施されているとはいえ、ステップ環境とうまく折り合いを付けて進められるか、両モンゴルの当局者・研究者がこの問題点をどのように解決し処理して行くか、今後十分に関心を払って調べる必要があると、私は考えている。

以下に両モンゴルの遊牧とその変化について、やや具体的に記す（注は紙幅の関係上、省略する）。

(1) モンゴルの遊牧 モンゴル（かつての外モンゴル、モンゴル人民共和国、今のモンゴル）と内モンゴル（かつての内モンゴル、現中国領内モンゴル自治区）の二つの地域（両モンゴル）のモンゴル人の遊牧（季節遊牧）は、大きな違いはなかった。

彼らは羊と馬を基本家畜とし、湿潤な森林ステップでは牛を多く飼い、乾燥したゴビでは駱駝と山羊を多く飼い、広い牧地で季節遊牧をしていた。羊の群れには、性格の強いことから山羊を3割程度混ぜて、羊の群れを安定させていた。馬は遊牧生産を高め、交通を迅速にし、人口過疎なステップに政治的統合を可能にし、農耕民を圧倒する騎馬軍団の機動力の礎となった。両モンゴルの遊牧民は内陸アジアの他の遊牧民とともに騎馬遊牧民と称されるべき存在であった。

農耕は地域によってある程度行われ、地域によってはほとんど行われなかった。ある程度農耕をしていた地域のモンゴル人の生業を農牧と言えなくもないが、両モンゴルの大半の地域では20世紀に入ってからも狩猟が遊

牧と並ぶあるいは遊牧に次ぐ重要性をもっていったから、内モンゴル東部に半牧半農を営むモンゴル人が現れるまでは、農牧という表現を安易に使うことはモンゴル人の生業に関して誤解を生むおそれがあると、私は考える。

アジア内陸の遊牧民はヨーロッパで発達した小銃、大砲等の火器で装備された農耕国家の軍隊に勝てなくなった16世紀以後、騎馬軍団の威力で長く保ってきた農耕国家に対する軍事的優位を失い、力による物資の獲得も困難となった。彼らはこの困難な状況を打開する術をもたず、以後、時とともに受け身の姿勢で行動せざるを得ない立場に追い込まれた。このことはモンゴル人も同じであり、内モンゴルが今の状態に置かれている理由の一つもそこにある。

(2) 内モンゴルへの漢人の入植と遊牧の変化

モンゴル人の遊牧の変化は、まず内モンゴルに生じた。17世紀に清朝の支配下に入った後、内モンゴルのステップは漢人居住地に隣接し、比較的湿潤な森林ステップが多いことから、その東部地域に漢人農民の入植が顕著に進行した。清末の新政開始とともに、内モンゴルへの開墾・入植が国策として進められ、その東縁と南縁が急速に開墾され漢人の住地となった。内モンゴル東部（フルンボイルを除く）では、20世紀前半にはモンゴル人の遊牧、定着牧畜、半牧半農、純農耕の地域・社会が併存し、これらに漢人の農耕地域・社会が併存する状態になっていた。季節遊牧はすでに興安嶺東の山岳地域の一部にみられるに過ぎなかった。内モンゴル東部の最大の特徴は半牧半農であり、現在モンゴル人の多くは半牧半農の民である。一方内モンゴル中部・西部では、モンゴル人は漢人が入植して来ると、ステップのより内奥に避難して牧畜を続け、そこにモンゴル人の牧畜社会を維持した。半牧半農は一部地域のみにも生まれた。かくて漢

人の社会は概して長城側に存在している。内モンゴル全域への漢人の流入は、現在まで続いている。

一方モンゴルは漢人居住地から遠く、しかも 1911 年に清朝からの独立を宣言し、ソビエト=ロシアの支援のもと 1921 年に革命が成功したため、漢人・ロシア人多数の流入とその永住を免れた。

(3)両モンゴルの牧農協同組合時代の牧畜

両モンゴルの牧民はともに 20 世紀に社会主義政権の統治下に入った。そしてともに 1950 年代末に、牧畜生産と労働を集団化し、経済経営体として機能し、かつ行政組織も兼ねる牧農協同組合（ネグデル、人民公社）に組み込まれた。そのさい牧民は古来私有であった家畜を協同組合の財産として供出させられ（少しだけ私有が許された）、組合の畜群を放牧した。この時期両モンゴルのモンゴル人は類似の体制に組み込まれ、史上最も管理された遊牧・農牧に従事したと言えよう。また畜産の方法をモデルとした品種改良、家畜小屋・家畜囲いの建設、井戸の掘削、飼料作物の栽培、牧草の刈り取りと保存、家畜衛生の改善等の牧畜の「近代化」政策が両モンゴルで実行され、遊牧の定着化と牧民の定住化の促進も、重要な課題とされた。19 世紀末以来、発展段階論の影響で、牧畜は農耕に較べて、また 19 世紀ヨーロッパに起源をもつ畜産に較べて、原始的・後進的と叩かれ続け、モンゴル人は自らの牧畜に自信を失っていた。中には後述のように、遊牧を公然と弁護するモンゴル人もいたが、遊牧がステップ環境と調和する方法との評価が勢いをもつのは、環境問題が重視されるようになってからである。

(4)内モンゴルの牧畜の畜産化 内モンゴルでは、1982 年に牧農協同組合が解散されたとき、家畜は牧民の私有に戻された。協同組合時代の品種改良等の牧畜の改善の成果はおお

むね維持されたとみてよい。その後牧民に牧地と農地がその使用权が認められて各家に分配され、私有のような状態になった。牧民は他家の家畜の侵入を防ぐべく自家の牧地を柵で囲い、今やアラシヤンの砂漠でさえ柵だらけである。牧畜社会は古来牧地を共有・共用してきたから、この変化は牧畜から畜産への転換だと理解される。畜産は、私有の牧場で営まれるのである。牧民や地域によっては、牧畜の畜産化に疑問をもち、分配された牧地を何人かの牧民が合わせて共用したり、集落の共用牧地を残したり、夏の牧地を共用したりして、牧地を広く使う工夫をしているが、大半は細分された牧地を自家のものとして使っている。内モンゴルの牧畜は終わったのである（復活する可能性がないとは言えないが）。

内モンゴルの家畜は、1980 年代末から急増し、1987 年の 3886 万頭から 2008 年には 9371 万頭に増えた。羊と山羊が激増したからである。だが馬は 1975 年の 239 万頭をピークに漸減し 2008 年には 79 万頭に、駱駝は 1982 年の 41 万頭をピークに 2008 年には 11 万頭に減った。これは、牧地の細分化と柵が、足の速い馬と駱駝にはやっかいな障害物となって飼育し難くなり、また乗用・荷物用の車の普及によって乗用、荷物用の役畜としてのそれらの価値が下がったことによる。2009 年には赤峰市ヒシクテンの旗長が馬は飼う必要なしと述べ、牧民が反発する事態が生じた。この事態は、羊と山羊の上述のような激増も含めて、内モンゴルにおいて家畜構成の大きな変化が生じたことを意味する。戦争における馬の利用価値はだいぶ前になくなったが、今や牧畜や交通における価値も下がっている。内モンゴルのモンゴル人はもはや騎馬遊牧民とは言えない。ちなみにモンゴルでも、内モンゴルほどではないが馬と駱駝の価値は下がってきている。

内モンゴルの牧畜の畜産化は、そこが中国における家畜の生産物供給の重要な基地との位置づけによるのであり、種々の技術を使って生産性を高め、内モンゴルを含む諸地域の住民に肉、乳を安定供給する狙いをもつ。それ等の地域には大都市が多く、その住民に肉・乳を供給する必要があるのである。内モンゴルのモンゴル人の大半が定着牧畜と半牧半農に従事している状態で、その畜産化が図られたということは、彼らの定着牧畜と半牧半農における牧畜は内モンゴル等の地域にそれらを十分に供給できないとの判断があり、それを畜産化することによって食肉・乳製品の供給量をもっと高めようとしていると思われる。

だが畜産は、19世紀後半に農耕社会であるヨーロッパにおいて誕生し、農業を基盤として成り立つ。そこで内モンゴルでも飼料作物や牧草の本格的な栽培を必要としているが、そこは寒冷な乾燥したステップで農耕に向いていないから、ステップを荒廃させる危険がある。

(5) モンゴルの体制変革と牧畜 モンゴル国では社会主義体制を棄て市場経済に移行した1991年に牧農協同組合は民営化されたり解散されたりした。協同組合の時代、牧民を定着化させる努力がされたが、自然の牧地に依存して移動する牧畜は遅れたものではないとか、党・政府は牧畜を直ちに定着状態に移すつもりはない等の見解が1980年代後半に公にされていたことからわかるように、その努力はたいした成果をあげなかった。また協同組合時代の品種改良等の遊牧の改善の努力も、多く放棄された。

牧農協同組合解散後、牧民はもとのように家畜を私有できるようになって生産意欲が高まったこと、体制改革期の混乱から逃れて牧民となった者が増えたこと等から、家畜が急

増した。そして牧民は市場の動きに敏感に反応し、山羊をその毛がカシミアの原料として高値で売れることから増やした結果、2004年に山羊の数が羊を上回った。また駱駝がかつての3分の1程度に減ってきた。これらはモンゴルの牧畜における家畜構成の変化として注目される。ただし馬は減っておらず(肉用に処理される馬は増えていない)これは馬の牧畜、交通上の役割がモンゴルでなお維持されていることを意味するのかも知れない。

(6) モンゴルの集約化牧畜と都市 モンゴルは今、遊牧の限界に直面している。モンゴルの遊牧は人口とりわけ都市人口の増加に応じた食糧の供給を迫られているが、それが困難だからである。同国は1956年に人口増加策を実施し、同年の85万人が2008年には268万人に増えた。増加分の過半は都市に吸収され、現在ウランバートルの人口は107万人(1955年:約13万人、1990年:58万人)である。加えてダルハン市とエルデネト市の人口を加えただけで都市人口は124万人に達する。この北部3市の住民にいかに食糧を供給するか。畜肉は、特定の牧民が畜群を地方からたらせながら都市まで追い立てる方法や11月頃に各地で家畜を屠り、自然凍結した肉を都市に運ぶ方法等がある。だが畜乳は、自給可能な量が生産されているものの、ステップに散在する牧民から集めて都市に運ぶことは、輸送や集荷システム・加工施設の不備もあって難しい。穀物栽培や、ウランバートル用の酪農・野菜類栽培のために設けられていた国営農場が体制改革時に大部分崩壊したことも困難の一因となっている。かくて現在モンゴルは乳製品の輸入国となっているありさまである。都市住民の食生活の変化にともなう鶏卵や豚肉、穀物・野菜類の需要増に対応することも強く求められているが、遊牧には問題を解決できない。

これらを主な理由としてモンゴルは、牧畜に関しては遊牧の改善を図るとともに集約化牧畜の振興を図り、穀物収穫の増加はもちろん、野菜・果実類の栽培をモデル農場や一般農民に普及させる「緑革命」政策を実施しはじめた。集約化牧畜とは、経営体の住居（固定住居）の傍に畜舎や家畜囲い、冬春季用の乾草や濃厚飼料の貯蔵所等を配置し、冬春季には舎飼いし、夏秋季に自然の牧地で放牧する。そして飼育対象となるのは、肉・乳用の牛、肉・毛用の羊、乳用の山羊、乳用の牛等で、このうち乳用の山羊、乳用の牛の集約化牧畜は人口集住地で行われるものとされ、特に乳用牛の集約化牧畜のモデル経営体の過半はウランバートルと主にモンゴルを南北に貫く中部地区（鉄道輸送の便がある）に設けられることが計画された。また豚、鶏も飼育対象とされ、ウランバートルをはじめ人口の多い場所で振興されるとされた。

集約化牧畜は、牧畜とはいえ、濃厚飼料も使い都市への生産物供給を重要な目的としている点等は畜産的である。ただ、内モンゴルのように牧民家族に牧地を分配して私有地のように使わせることはしていないし、集約化牧畜をモンゴル中に広めようともしているわけでもないから、畜産とは異なる。だが、両者の違いは明確なようで、実際にはそうとも言えない。そもそもこのような取り組みがなされているのに、内モンゴルの畜産と共通する事情があるし、モンゴルでも牧地の私有化への動きがあるからである。すなわちモンゴル政府も、2003年策定の「集約化牧畜の発展を支援する綱要」において、集約化牧畜の経営者・経営体に牧地と草刈り場を所有させる方針に沿って「土地法」に追加と変更を行うとしたのである。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1)吉田 順一「モンゴル国の遊牧」、『ワセダアジアレビュー』(早稲田大学アジア研究機構) 査読なし、第5号、2009、28-33頁
- (2)吉田 順一「Nüüdiyn mal aj akhuy ba tүүнийг өөрчлөkh аsuudald(遊牧とそれを変革する問題)」(モンゴル文),*Nomadic Studies Bulletin* 14.2007,査読なし,International Institute for the Study of Nomadic Civilization, Mongolia, 2007, pp.91-94.
- (3)吉田 順一「内モンゴル東部地域の経済構造」、『モンゴルの環境と変容する社会 東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告II』、査読なし、同センター叢書27号、2007、171-186頁

〔図書〕(計1件)

- (1)吉田 順一「モンゴルの遊牧経済」、朝倉書店、岡洋樹他編『東北アジア』(朝倉世界地理講座2)(共著) 2009、314-324頁

6．研究組織

(1)研究代表者

吉田 順一 (YOSHIDA JUNICHI)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：70063716